琉球大学学術リポジトリ

宮良長包研究(2)　音楽教育の思想と実践

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中村, 透, Nakamura, Toru
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/913

宮良長包研究（II）

——音楽教育の思想と実践——

中村　透

THE STUDY OF CHOHO-MIYHARA

THE THOUGHT AND PRACTICE OF MUSIC EDUCATION

Toru NAKAMURA *

(Received Aug. 20. 1985)

1．音楽教育者宮良長包

宮良長包は，一般に本県の文化史的人脈では，作曲家として位置づけられている。しかしその評価のされ方は必ずしも一様ではなく，「沖縄のフォスター的存在」[1]という観方がある一方，すぐれた「民謡作家」[2]という促え方もある。また，「琉球音楽の世界を西洋音楽にとり入れた」，「郷土音楽の発掘，創作」の初期的人物として語られるが，それも現在のところは極めて心情的共感の域を出ていない。にも関わらず本県の音楽文化の動向をみたとき，たとえば戦前の合唱活動の始動期，戦後の復興期における演奏活動の開始期などにあっては必ず長包の作品が何らかの契機となっていることは否定し得ない（巻末「合唱史年表」参照）。

これは，戦前，および戦後の本県下の音楽活動の担い手たちが，ほとんど教育界の人材であったことに帰因するものである。長包は戦前の県師範学校で県人としては初めて「唱歌科」担当の教諭となり，その在職期間は1921（大正10）年から1938（昭和13）年の17年間に及んでいる。この間長包の薫陶を受けた学校教師たちが事実上戦前から戦後20数年までの県下の教育界を席捲していたことを顧れば，音楽教育は勿論のこと，一般的な音楽活動にあっても長包の直接的間接的な影響力は無視しえない。

さらに師範学校教諭として指導的な立場にあったことから，長包の音楽教育思想とその後の展開を探ることは，戦前の本県下における音楽教育の動向を知る重要な手がかりとなろう。また，我が国の音楽教育の開始が洋楽の導入に始まり，和洋楽の折衷という試行期間を経て唱歌教育へと落着していく歴史過程は，そのまま戦前の沖縄の状況にも波及するのだが，本土と異質の音楽文化を所有する沖縄にあっては，本土の普及状況とまったく同質ではあり得なかった。言語，音律，リズム感覚，題材はむろんのこと，楽器，歌唱スタイル等に関することまで独自の様式——それは同時に独自の美感，美意識を譲成してきたのだが——を根強く持っていたし，また現在もそうであるからだ。民族音楽学的な視点が未だ確立されていない戦前の文化状況下にあって，長包の置かれた立場は，和洋折衷どころではなく，和洋琉の間に切りさかれるようなものだったのではないか。とすれば，長包の作曲活動は単なる作曲家のそれにとどまるものではない。目前の教え子たちと，唱歌教材との矛盾をどのように解き放つかという，教育者としての逼迫した時点での営為であったことは疑いをいれないのである。

筆者は，本研究(1)で，主として長包作品の時代的分類と作曲様式の分析的アプローチを試みた。[3]本論では，一応その作品を離れ、長包の記述した論文を中心に紹介すると同時に，その音楽教育思想の展開を考察してみたい。論展開にあたっては，同時代の他者論文等も広く紹介するようつとめた。戦前の沖縄における音楽教育の動向をより適確に把握するためである。紙数の関係上本号では大正初期までにとどめたが，それ以後については次の

機会に譲りたい。

なお，巻末の「沖縄合唱史年表」は，新城安哲氏[4]の労作によるものである。戦前，戦後を通じて本県下の音楽活動の動向，歴史過程を探る上で極めて重要な資料なので，敢て依頼し本論に掲載させて頂いた。同資料の作製に与って力のあった高良倉吉氏（沖縄史料編集所所員）へと共に謝意を表したい。

宮良長包の教職歴

1908（明治41）：石垣・登野城尋常小学校（訓導）
1915（大正４）：沖縄県師範学校附属小学校（訓導）
1919（大正８）：仲西尋常高等小学校校長（第九代）
1920（大正９）：小禄尋常高等小学校校長
1921（大正10）：沖縄県師範学校教諭心得（後に教諭）唱歌科担当

（第１章　註）

1．宮城鷹夫「沖縄・わが心のうた声――宮良長包の世界とその背景――」プロジェクト・オーガン出版局1975年
2．「沖縄縣史」第一巻、「文化の動向」P.744に次のようにある。
　「（汗水節）を含めて彼（長包）の作品のほとんどが今日ひろく唱われているにもかかわらず作者名を知る人が少なくなっているのは，すぐれた民謡作家だといっていいものであろう。」（大城立裕）
3．中村透「宮良長包研究１―作品―」
　琉球大学教育学部紀要　第23集第１部．1979
4．新城安哲，沖縄男声合唱団団員，沖縄県公害衛生研究所ハブ支所研究員．
　同資料は氏が，数年に渡ってほんとんど独力で調査したものである。

２．明治末期の県下における唱歌教育の状況

県下の唱歌教育がいつ，どのような形で開始されたかは現在のところ定かではない。全国的な傾向をみると，1872（明治５）年の学制頒布時点で，唱歌は「当分之ヲ欠ク」という状態で，その実施には伊沢修二，目賀田種太郎等の「音楽取調掛」設置（1879・明治12）を持たなければならなかった。さらに同掛設置後も数年に渡る教材の設定，検討の時間を要し，ほぼ全国の小学校に唱歌が普及したのは1890（明治23）年代になってからといわれる。

本県に一番初めに設置された教員養成機関が，1881（明治14）年の，師範学校速成科であり，その後同科はさまざまな改組を経て，修業年限４年の師範学校となったのが，1886（明治19）年，初代文部大臣森有礼による小学校令，中学校令，帝国大学令，師範学校令が発布された年にあたる。この時点で師範学校は学科目に「音楽」が規程として位置づけられた。

一方，初等教育の方ではどうであろうか。県史によれば，同年の小学令を受けて本県が指示した「小学校教科用図書及び其配当表」1888年（明治21）に，唱歌，あるいは音楽に関する図書名を見出すことはできない。[1]その後の改正小学校令（1890，明治23）を受けての修身教育の強化過程で，一教師の実践報告として唱歌らしきものが述べられている。すなわち「所謂忠君愛国の精神を，彼等可憐なる児童が脳裏に感染せしむるは，寔に尋常一様の骨折りにては，其実践躬行を課し，以て其効を奏する難からむ」[2]のだから，「修身上，最も了解し易き」「数え歌」を考案し毎週の始終（月土）に合唱させている。下記にその数え歌を引用しよう。

尊皇　一ツトヤ　広い世界に，二ツなき――
　　君に忠義を尽すべき――
孝順　二ツトヤ　二人の親を大切に――
　　朝夕孝行尽すべし――
友悌　三ツトヤ　みな兄弟，むつまじく――
　　互に情を尽すべし――
信実　四ツトヤ　善き友選べば，身の守り――
　　信を尽くして交はれよ――
恭倹　五ツトヤ　いつも倹約，是れ宝――

		無駄を省きて働けよ――
博愛	六ツトヤ	無理をするなよ，吾れ人に――
		人の痛さ，身の痛さ――
学習	七ツトヤ	何よりたからは，学問よ――
		昼夜勉めて，怠るな――
公益	八ツトヤ	やがて開けむ，宮古島――
		いつまでも頑固で済む者か
遷法	九ツトヤ	心に誠を守りなば――
		世に恐るる事もなし――
義勇	十ツトヤ	外国人（とうくにびと）が来るならば――
		日本心（やまとこころ）の花見せむ――

――――――は最後の句をリフレイン

詞から察するに，宮古島の教師の作であろう。頑固（党？），外国人（とうくにびと）などの語句から，人心が未だ大和への同化過程にあるものと推察されるが，これが発表されたのは1897（明治30）年である（琉球教育第19号）。離島にあっての実践であるから，沖縄本島との時代意識のズレも予測されるところではある。が，ともあれこうした情勢を総合的に観察すれば，本県における唱歌教育らしきものがようやくその端緒についたのは，四年制師範科卒生が教師として教壇に立ち始めた1890（明治23）年代の頃，厳密には，その後も「唱歌」として独立した科目で扱われたとは推察し難く，おそらくかなりの長い期間に渡って修身教育，あるいは国語教育の方途として〝唱う〟ことが部分的に要求されたに過ぎなかったのではないか。

1907（明治40）年，小学校令の改正によって尋常科の唱歌が必須教科として明確に位置ずけられた。周知のようにこの時点で唱歌科は，その目的を「平易ナル歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ兼テ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス」と規定される。この唱歌科規則は爾後30年の間維持されることになる。こうした改正，あるいは位置づけを具体化するために文部省では1907～1914（大正3）年にかけて、同省制定による＜尋常小学読本唱歌＞，つづいて学年別による＜尋常小学唱歌＞教科書を発行し全国にその普及をはかることとなる。もっともこれに先立つこと14年前の1893（明治26）年に文部省は，「小学校祝日大祭日儀式唱歌」を選定し同年8月告示している。学制頒布以来20年間唱歌の教科内容について沈黙を守っていた文部省は，教育勅語発布（1890．明治23）の翌々年，同唱歌の取扱いについて各道府県に詳細な訓令をだしている。この訓令には，「唱歌ノ人心ヲ感動スルカノ大ナルハ普ク人知ル所ナリ故ニ之ヲ教育上ニ適用センニハ須ラク其歌詞楽譜ノ雅正ニシテ心情ヲ快活純美ナラシムルモノヲ採択スヘシ殊ニ小学校ニ於テ祝日祭日ノ儀式ヲ行フニ当リ用フル所ノ歌詞楽譜ハ主トシテ尊王愛国ノ志気ヲ振起スルニ足ルヘキモノ所謂国歌ノ如キモノタラサルヘカラサルハ論ヲ俟タス然ルニ未タ適当ノ歌詞楽譜ナキカ為往々杜撰ノモノヲ用フルモノアリ是レ教育上深ク憂ウヘキコトナルヲ似テ本令ヲ発シタリ」[3]の説明が附されている。それらの唱歌は次の8曲である。[4]

君が代（古歌，林広守作曲）
勅語奉答（勝安芳作歌，小山作之助作曲）
一月一日（千家尊福（たかとみ）作歌，上真行（うえきねつら）作曲）
元始祭（鈴木重嶺作歌，芝葛鎮（よじつね）作曲）
紀元節（高橋正風作歌，伊沢修二作曲）
神嘗祭（木村正辞（まさこと）作歌，辻高節（たかみき）作曲）
天長節（黒川真頼作歌，奥好義（よしいき）作曲）
新嘗祭（小中村清矩作歌，辻高節作曲）

山住の研究によれば，本土の教師たちは概ねこれらの方向を積極的に受け入れたようである。「小学唱歌をいくら教えてみても卑俗な歌を一掃できない」というあせりから「どんなものであれ一定の方針にしたがうことで安心感がでてくるし，その方針に期待をいだく」背景があったからだ。[5] いわゆる儀式唱歌の本県における受け入れ情況はいかがなものであったろうか。おそらく，言葉（歌詞）や旋律の異質性もあって，本土各県のような速（すみや）かさで普及したとは考えにくい。が，たとえば「今次の太平洋戦争におけるわが国の敗戦に至るまで，凡そ60年，連綿と続く『御真影』への尊崇とその『忠誠』なる『擁護』」（県史第四巻，第四編）の情況を鑑ると，児童，生徒たちの受けとめ方はどうあれ，行事の度毎に半ば強制的に歌わせることで遅速とはいえその普及がはかられていったことであろう。

尋常小学唱歌は先に述べたとうり，文部省の名で発行した最初の小学唱歌教科書である。

このなかには，後世に残った「ツキ（月）」「ふ

じの山」「春が来た」「われは海の子」などが含まれるが，歌詞のほとんどが韻文教材である。これより以前，1903（明治36）年頃に本土では田村虎蔵（1873～1943）等による言文一致唱歌「幼年唱歌」(1900)「少年唱歌」(1903）などがあり，また1901（明治34）年には，滝廉太郎編著による「幼稚園唱歌」[6]――「鳩ぽっぽ」「お正月」――などがある。明治30年代から40年代にかけても数種類の唱歌集・教科書が諸出版社・教育機関から発行されており，唱歌に関しては1941（昭和16）年までは国定教科書制度が実施されず検定制によっていたことを考えれば，どの種類の唱歌集・教科書が県下で使用されていたかは，断定できない。おそらく，地理的状況，経済的事情から察するに，少なくとも明治40年代から大正初期にかけては，文部省編の尋常小学唱歌が主たる教材として扱われ，部分的に他教材も取り扱われたのではないだろうか。

この時代，明治30年代から40年代にかけて本県下における唱歌教育の揺監期，つづく40年代から大正期にかけては，安定にむかう時期と考えてよいだろう。この安定にむかう時期に長包は師範学校を了（お）え，教師の道を歩み始めるのである。

第２章　註

1．「沖縄縣史４．教育」第四編第二章
　阿波根直誠，1966．琉球政府
2．同上書，346p～以下の数之歌も同様。この数之歌は「琉球教育」第19号．明治30年より転載
3．山住正己「唱歌教育成立過程の研究」東京大学出版会1967．279p.～
　同文は文部省訓令第二号．
4．井上武士編「日本唱歌全集」音楽之友社1967．403p.～
　この全８曲のなかで必ず歌われたものは「君が代」「一月一日」「紀元節」「天長節」とある。
5．前掲書３．280p.～
6．滝廉太郎編著「幼稚園唱歌」は東京・共益商社より発行されており，後に長包は（昭和７年頃）同社から作品集「首里古城」を刊行している。

３．唱歌の教育的位置づけ

長包の唱歌教育に対する考え方は，先ず1911（明治44）年10月に論文の形で発表されている（沖縄教育第66号，15p～20p.)。「教育唱歌の研究」と題された同文は，長包師範卒３年後，登野城尋常小学校在職時代のものである。

第一章を「唱歌教科の身体陶冶」，第二章を「唱歌教科の精神陶冶」と，身体と精神の教化に関わるものとして唱歌を位置ずけ，その根拠を論じている。文中第一節「聴覚の練習」では先ず「健全なる脳力は健全なる聴覚に宿る」とし，その理由を「聴覚はあらゆる感覚中最も玄妙なるもので且精神活動の上に大なる影響を及ぼす」ものであり，その証左に「口が廻らなくとも大文士もあり大政治家もある，鼻がかけても策士もあり才子もある。目が見えなくともいくらも儒者があり学者もある。耳の聞こえぬ者に碌な者は無い，即ち耳の聞こえぬ者に限り悩が足りない様である。其為めにか，口には締りなく一見して其鈍物たる事が分る。」とし，いかにして聴覚を錬磨させるか。すなわち「音楽唱歌の霊妙なる力を藉らねばならぬ」。科学的根拠として聴覚器官の機能を説明し「人工の楽器に起りたる音波は空気の振動により耳内にある固有の楽器にて受け直に聴神経を刺戟し，脳裏に印象を与へ此印象は必ず感情を喚起す，而して感情は意志を刺戟し，意志は行為となりて現はれる」ので「聴覚の不完全なものは，精神活動も遅鈍で，且，脳力も薄弱になる」。従って聴覚の練習とは「身体上の陶冶の一つ」にして「最も注意」せねばならないとする。

第二節「聴（ママ）聲練習」（練聲練習の誤記ではあるまいか？）では，呼吸器の強化腹部運動による健康増進をはかるために，長包の工夫する「学術的練聲法」と，そのより発展した活動としての唱歌の効用を述べている。ここでいう「学術的練聲法」はいわば発声練習のようなものらしく，その具体的方法は不明だが，第一に「鼻から呼吸するのであるから口は唯聲を出すのみに使ふ」，第二は「口内及び咽喉を廣大にすることを務めしむる」ものである。こうした練聲と唱歌は，「呼吸器を強壮」にすることで「新しき血液が全身を循環する事を

速にし。」さらに腹部運動から非常に「食欲」と「消化力」を増す。一方で「唱歌を歌ふ者は更に運動して居るといふ感が無くして運動して居る」ので，「一方に於て疲労を消滅せしめつつ，又，一方では大いに活発なる気を養ふ。」の結果，「音楽唱歌の功果著はれ，聴覚の練習と共に身体上の陶冶，即ち，唱歌科の直接目的となる」と結んでいる。

要するに聴感覚を養うことで活発な精神活動を，歌ふことで身体の健康を著しく増進させるのだから，唱歌の第一目的はここあるというわけである。幾分その論調は強引の感を逸れないが，これは後述するように当時の教則や唱歌教育への一般的考え方を長包なりに肉づけしたものと解していい。ここで注目しておきたいのは，若き長包（25歳）の唱歌教育にかける情熱と，論を強化するための例の揚げ方の多様さであろう。[1]

第二章では，唱歌の精神的教化について論及している。元来音楽は「人性の自然に出づるものにして精神活動の自ら外部に顕はれ出づるもの」であるとし，「人心の感動」に大なる力がある。この感動の由縁は「元来吾人の美感を喚起するものは，五官中，唯神官と聴官とあるのみにて，耳により媒介せらるる音響は吾人をして音楽の美を感ぜしむる度が強い」とみる。また音の美を

叙情の美（主観的美）……感情＝人間の内側の活動を現はす

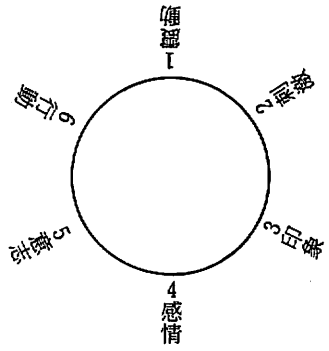
模倣の美（客観的美）……自然の現象を模写する

と類別し，こうした両者の写実の力は他の美術領域の美よりも「速かさ」と「総合性」において秀れていると考え，そもそも「美的情操」の人生における意義は「吾人に高尚なる快楽を与ふること」であり，音楽は「嗚呼，其色なく形なく唯緩急高低強弱ある音を以て吾人の感情を刺激し，吾人をして感情に虚盈あらしめ吾人をして萬斛の情を湯がしむ，是即ち吾が其美を感じ美的情操を養成する所以」と嘆じている。またここでいう「高尚なる快楽」は精神生活上の要「真善美の理想を満たしむべきもの」の一である。

第二節「徳性の涵養」で長包は注目すべき視点を提している。そもそも「徳・不徳」の価値判断は，人間の自由意志にもとづく「行為」に関することであり，その意志は「感情によりて刺激・支配」されるものである。従って感情は「意志の主人公・且，行為の本尊である」。

いわば人間の「行為」の源は感情，感情根源説をとっているのである。それではその「感情」を刺激するものは何か。「空気を振動して吾人の聴官を刺激し，脳裏に印象を与ふ」音楽なのである。すなわち「音楽の音楽たる所以は，聴者をして各自感情の捕虜たらしむるにある」のである。

こうした関係を長包は次のように図示している。



先に注目すべき視点と述べたが，一般に儒教倫理的な視点で，半ば教条主義的に促えられていた「徳性の涵養」を，稚拙とはいえ心理学的なアプローチで敷衍しようとしているのである。同時に本節では，「徳・不徳」の価値判断を絶対的な基準におくのではなく，あくまでもその国の風俗，習慣によって異なるという相対的な視点を据えている。このことは感情論の重視とともに，後の長包の教育論の展開が，大正デモクラシー影響下「動的教育」の新教育思潮にむかっていった背景のひとつとして促えられ得よう。さらに，郷土教育，殊に沖縄音楽を本土の諸音楽と相対化して有価値なものとして評価する態度にもつながるものではなかろうか。長包はその論を次のように結んでいる。

「其国の徳風を知らんと欲せば，其国の音楽を知るべし，とは音楽と道徳とが既に自然の関係あるが故である，国民の風俗は国民の意志の顕表にして国民の意志は其国民の感情に依りて支配せらるるものである，而して国民の音楽は其音楽の如何によって其国の風俗が察せらるるのである，是に依って是を見れば，小学唱歌は教育を成熟せし

むる最後の機擧と云はねばならぬで従って其教授の方法を忽にしてはならぬ」。

翌1912（明治45）年1月，長包は同じ「沖縄教育」（第69号，20p～24p）で，具体的な唱歌教授の方法を各学年ごとに系統化して詳述している。「教育唱歌の研究（続き）」[2]と題する同文では各学年の教育目標を次のように位置づけている。

(1)尋常一・二学年にありて修身国語及び動作遊戯と連絡を保たしめ且児童日常の親しき事項を選択せざるべからず。

(2)尋常三・四学年に於ては前項に準ずると雖ども動作遊戯との連絡は之を避くべし。

(3)尋常五・六学年に於ては修身国語の外地理歴史理科等に関係ある事項を加へ人情の美自然の美等に及ぼし以て各教科と連絡統合を完からしめん事に注意して選択せざるべからず。

(4)季節と連絡を保たしむることは最も大切なり即ち三伏の炎暑に雪霰の歌を謡ひても何等の感興起らざればなり。

（第一節.「唱歌題目につきて」）

いずれも今日いうところの統合教育を奨めている。季節の項を別に設けているのは，本土の季節感によって彩られている教科書が，沖縄の事情とは合わないことに注意を喚起しているのであろう。

教材の設定については，歌詞と曲節の二点から行なっている。

歌詞については，

(1)国語程度に順応せしむるものにして尋常一二学年にありては快活にして童話的のものを主とし児童の心理に適合せる事実的のものを副として選択すべし。

(2)尋常三学年よりは童話的のものを避け勇壮活発なるものを加へ以て国民的感情の養成に資し又道徳的のものを加へ以て徳性涵養に資すべきなり。

(3)尋常五六学年及び高等科にありては漸次優美高尚のものを多く加へざるべからず。

(4)尋常五六学年及び高等科に於て男子共学の級は歌詞を区別して課する要ありと雖も可成男女共通の材料を多く選択せざるべからず。

(5)凡そ語句は平易流暢にして児童の詩想を謡ひ出でたるものなるべく而も児童的興味を失はざるものたらざるべからず。

(1)～(5)はほぼ唱歌科の規則を踏襲し，部分的に当時の国情を反映して「童話的なものを避け勇壮活発なるものを加へ以て国民的感情の養成に資し」の語述がある。注目すべきはやはり最終の項目であろう。ここには長包自身の教材観が色濃く現われている。

さらに続く第三節～第六節では，歌う音域，音程，拍子を段階的に分類し，口授法（単式，複式の別），略式視唱法[3]，本譜視唱法[4]の順でその教授法を位置づけ，具体例を略譜（数字譜）によって表わしている。ここでは尋常五学年の内容を抜萃してみよう。[5]

尋常五学年

音域：ト～ホ

音程：七八度以内

拍子：2/2，4/4，4/8，4/2，3/4，3/2，6/8

教授法：略式視唱法

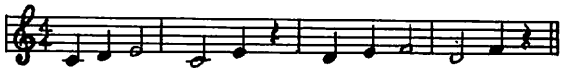
教授上の要件：

(1)此学年よりは充実せる聲音を使用せしむべし

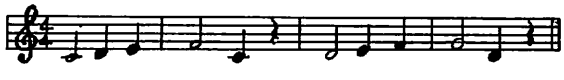
(2)音階練習は其時間に用ふる調による法可なり，但其調にて非常に高過ぎ又は非常に低過ぎる時は「ハ調」によるべし。

(3)音程練習は新曲中の難所を取り且三，四，五，六度の規則的のものを教ふるを可とす

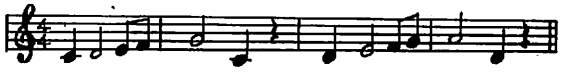
三度音程：123-｜1-30｜234-｜2-40｜



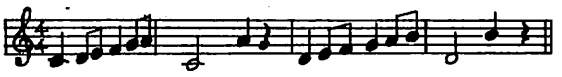
四度音程：1-23｜4-10｜2-34｜5-20｜



五度音程：12　34｜5　－10｜23　45｜6－20｜



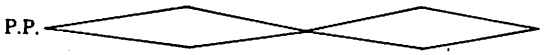
六度音程：1 23 4 56 | 1 −60 | 2 34 5 67 | 2 −70 |



(4)読譜力の養成の為指唱的練習（示範を与へず）をなし或は応用練習として教授したる曲節の一節に類似したる曲節を板書して示範なく唱へしむべし。

(5)音階，音程，口形，聲音の練習を個々別々に行ふ時は無趣味にして時間を費すのみならず其効果薄し然るに之を総合して行ふ時は短時間にして趣味多く且，奏効大ならしむるものなり。

但此際口形，発音，強弱等にも注意すべし。



(1)1 12 3 34 | 5 65 3− | 5 56 7 1 | 17 67 5 −|

(2)アアーアアー アアーアー エエーエエ エーエーエー

(3)アアーエエー イオーウー イイーイエ アアエイオウー

今でいう発生練習と略式譜によるソルフェージュの訓練である。しかし，音階，音程，口形，声音の訓練を個別にやるのではなく，統合して短時間のうちに集中学習させる方が効果的であると述べている。とすれば，残りの時間，（おそらく大部分の時間）はどのような教授を行なったのだろう。「優美高尚」なる歌詞のものを，あるいは「平易流暢にして児童の詩想を謡ひ出でたるもの」を「修身国語，地理歴史理科」と絡めて「人情の美自然の美」に寄せて展開したのであろうが，同論からはその具体的な様子を知ることができない。

本土との唱歌教育の関連はいかがであろうか。時代はやや遡るが，1892（明治25）年の，東京音楽学校生の記録「唱歌教授法」にその一端がうかがえる。[6] そこでは唱歌教授の意義を「音楽ハ人間各々ノ性ニ敵シテ人心感動ヲ与フル者ナリ」と概括し「其曲正シケレハ即チ正シテ徳性ヲ養フ事ハ勿論ナリ夫レ故君徳ヲ賞セシ歌ハ尊王愛国ノ心ヲ養成スル効アリ」「衆多ノ者カ共ニ唱歌ヲ為ハ自然共同進化ノ感ジヲ生シ又朋友相和シ相愛スル情ヲ起ス益」「健康上ニモ大ナル効アリ」などの効用を記述している。ここで第一に強調されているのは「徳性ヲ養フ」ことである。次いで付帯的に，「朋友相和シ相愛スル情ヲ起ス」「健康上」の効が説かれている。具体的な教授法としては，楽曲に対する訓話や児童との詞の内容をめぐる想定問答が示されている。さらに一般的な教授法として

第一　楽曲ヲ数字ニ適シ其階名ヲ練習セシメ稍々熟シタル後更ニ之ヲ音譜ニ変シ五線上ニ移シテ猶ホ練習セシメ然ル後歌詞ヲツケテ唱フ事ヲ教ユ

第二　楽曲ヲ楽譜ニテ黒板ニ記シ階名ノ問答ヲ為シ其上ニ数字ニテ記サシメスヲ練習セシメ稍々熟シタル後数字ヲケシ音譜ノミニテ階名ヲ練習セシメ然ル後歌詞ヲ附シテ事ヲ教ユ

第三　楽曲ヲ音符ニテ黒板ニ記シ階名ヲ練習セシメ熟シタル後之ニ歌詞ヲ附シテ唱フ事ヲ教ユベシ

とある。

山住によれば，歌詞のとり扱いの場面設定が不明であり，楽譜重点主義があるために，現場に普及したときの唱歌教育は「一方では『徳性涵養』の手段としてのみあつかわれ，地方では音楽（洋楽）の知識・技術の注入にのみ精力がそそがれるという分裂状態」[7] をひきおこすこととなった。

長包の「教育唱歌の研究」は，その20年後に書かれたものである。この間本土では，東京師範学校や同付属小，東京音楽学校を中心として唱歌教育の様々な研究や改良，あるいは具体化の努力がなされたであろうし，おそらくその事情は本県の教育界でも同じことであったろう。明治25年の「唱歌教授法」（東京音楽学校生）と明治44年「教育唱歌の研究」（長包）を比較してみると、その基底には「徳生の涵養」という修身教育の発想が根強くある一方で，後者はより具体的実践的な側面が強く，同時に，思想的にも一層の展開をみせている。

何より大きな相違は，後者の場合唱歌を，児童の「肉体」と「精神」の教化という二元論的な足場に立ってとらえていることである。

「徳性の涵養」と「美的情操の淘汰」を敷衍し

たこの二元論はしかし，当時の教育界の趨勢でもあったらしく，1910（明治44）年，6月上原整吉は「沖縄教育」（第62号）誌上で，同様の論を展開している（「唱歌教授に関する研究」）。

上原は教授の目的を次のように概括している。

目的
- 直接目的　身体的陶冶
  - 発声器関の鍛練
  - 聴官練習
  - 健康を増進す
- 間接目的　精神的陶冶
  - 美感の養成
  - 徳性の涵養

上原は，先ず第一章で唱歌教授の沿革を略述し，当時の東京高等師範学校附属小学校の田村虎蔵の説を借りたものだと前置きしている。そして音楽の起源は遠いギリシアの時代，我が国に於ては「神代」の時代からありながら，その教授法の起源は「実に明治五年の近い過去にあるので未だ充分なる研究を積まざるは誠に惜しむべきことではないか，近時教育者の注目する所とはなって研究に志す者輩し来たのは喜ぶ可きこととて世の教授者猶進んで児童音聲につき，楽譜使用につき唱歌教材の研究につき遺憾なき様研究せられんことを乞ふ」と呼びかけている。先に引用した長包論文はその直後に掲載されたものであから，この呼びかけに応じたものとみてよいだろう。

一方で山住のいう「音楽（洋楽）の知識・技術の注入にのみ精力がそそがれる」という現象は，本県下でも観察される。既に上原の呼びかけの内容「児童音聲」「楽譜使用」「唱歌教材の研究」にも窺えるように，以下の具体論でも音域，音程，題目，歌詞（純潔にして多趣，平易流暢にして児童の興味を失はない，他教科との連絡）などを箇条書きで述べているに過ぎず，以下の論旨を概略すると，

発　聲　法：地声，裏声，上声の三種を音域に応じて用いる。姿勢を正し胸をはり喉頭を十分に開かせる，教授の場合は成るべく弱声，練習の際には漸く声を十分に使用

止　聲　法：漸々弱くして後に少しく強く鐘を打ちたるが如く

音 階 練 習：発声を自由ならしむ，歌の連続的関係を練習し得，歌曲教授の予備的関係をなす

練習の場合：全唱，組唱，独唱など，自然強弱，人為強弱及び緩急を附して美技に謡はしめん

聴 音 練 習：高の高低・長短，歌曲中の一小節，既習歌曲の応用，謡れる旋律，音程の種類

曲節の取扱：三・四年～譜の読み方，簡単なる音符及び休止符の時間，継息記号，特別なる記号（#，♭），など

五・六年～最も普通なる音譜及び休止符の種類，強弱記号及び連続記号，小節，曲想の存する所を明にす

（いずれも傍点中村）

とあり，注入的な方法でのソルフェージュ的訓練にむかう方向と観ることができよう。このことは，たとえば「歌曲教授は何日頃から始むべきか」で，「唱歌教授の目的は曲節，歌詞両々相俟って初めて達し得るもの」としながらも，「曲節は音楽の基本練習に重きを置くものであるから自然児童の倦厭を逸ぬれないのである故に音楽の基本練習に困難なる初年者（尋一，二，三，）には曲節を用ひざる口授法によって行くのであるが之れも止むを得ない事から来たので，実言へば両者共併用せざるを得ないのである」（傍点中村）。

ここでいう曲節は，純粋形体としての旋律のことであろう。略譜か本譜かはさておき，児童がどのように音楽を体験して歌うかという視点よりも，いかに早く楽譜への導入をはかっていくかに関心が集中している。こうした情勢を裏付けるものとして当時師範学校生であった山内盛彬の「小学校唱歌雑感」（前掲，「沖縄教育」第65号）を揚げられる。山内は当時の教授法議論の中心事であったと思われる「略譜か本譜」で，明確に「本譜採用」の立場をとり，その理由を次のように述べている。

「内地では箏の譜は，沖縄の箏の工工四と全く似たる譜あるに関らず，現今は琴のみならず，諸楽器の楽譜総て共通なるペトリッチ氏譜（俗にオ

ルガンの譜又は西洋楽譜）を用ひて，唱歌俗歌とも書かれる様になった。猶ほ桃原の夢を貧りつつある我が県民は，かかる日進月歩の世の中に猶ほ，旧世紀の不完全極る工工四なるものを以て将来満足せやうか。吾人は何でも，現在使用して居るものよりも完全なるものを見れば直ちに旧を捨てて新を採るは音楽の譜のみでない。故に必ず将来工工四を捨てて西洋譜をとるであろう。（工工四の如何に不完全なるかは比處では云はない）西洋譜でも不完全の略譜をとるよりも完全に近い本譜（五線を用いて高低を表す）をとるこそ上手段である。」

つまり五線譜の合理性，本土における普及性に着眼しその採用を強調しているのである。その語調には，琉球伝統音楽を背後にもちつつ，一種文明開化的な視点で新しい音楽記述法を摂取しようとする気負いすら感じられる。事実山内は同文で，琉球古典音楽の「口説」を工工四から五線譜に書き改めている。この試みは，後に述べる「郷土音楽との関わり」への関係がより深いので，章を改めて触れることにしよう。

ともあれ，明治44年頃から，長包を初めとして数人の教師たちが，唱歌についての教育的意義づけを熱心に論じ始めていることは注目に値しよう。ことに長包はこの時八重山に居たことを思えば，県下全域に渡って少なくとも建前上は唱歌教育の意義が徹底していたとも推察される。しかしそれは同時に，音楽教育の本土への同化という形で進行したことを見落としてはなるまい。

（第３章　註）

1．全体に長包の音楽教育に関する論文は，同時代の他者のものと比して，説得的な強さをもつ文体が特徴である。
2．同文の寄稿者名は宮良波響となっている。波響名の寄稿は後述する「沖縄音楽の沿革及び家庭音楽の普及策」にもあり，その内容，第一稿めとの関連性，さらに語調から観て長包のペンネームと断定してよい。
3．略式（譜）：音階順に数字化した記譜法
4．本譜：今日広く用いられている五線譜
5．音程練習の五線譜は，中村が転記したものである。以下(5)も同様
6．山住正己「唱歌教育成立過程の研究」東京大学出版会1967，218p.～
7．同上書，218p.16行～17行，

4．郷土音楽との関わり(1)

唱歌教育に関する論，レポート類，少なくとも公的な形での主張に「郷土音楽」が現われるのは先に引用した，山内盛彬の琉球古典音楽が最初のようである。しかし同文では，五線譜採用のひとつの論拠として工工四と対比的に扱っているに過ぎない。少なくとも，琉楽の芸術的・教育的価値までは論及されていないのだ。

これに対して長包は，1912（大正元）年８月，「沖縄音楽の沿革及び家庭音楽の普及策」（「沖縄教育」第76号）で沖縄音楽の芸術性を説き，併せてその「健全化」へむけての「改良策」を提言している。この論文は間接的には山内論文の一部をより積極的におし進めたものともとれるが，直接的には1911（明治44）年９月，同11月に同誌に掲載された矢野勇雄（勇椎？）の県下における唱歌教育の児童の反応，そこから遡求した沖縄音楽への観方へ反論する形で出されたものである。[1] 従って長包の主張をとりあげる前に，先ず矢野の視点を説明する必要があろう。なお，矢野勇雄についての倭細は不明だが，その論調や引用内容から本土出身の教員で，当時の東京の音楽界事情にも詳しい人物であったようだ。[2]

矢野は「音楽の三大要素に就きて」と題し，拍子（タイム），調子（キーエス），発想（エキスプレッション）を三大要素と前提しそれぞれを次のように説明している。

拍子（タイム）……事物に相遇する毎に必ず（来たす）其事物と相等したる感情の波動的変化，（音楽では）演奏者の進行せしめつつある拍子と聴者の予期したる拍子とが自然に融合して得られる音楽的快感

調子（キーエス）……主として声楽における調和のとれた声，すなわち

イ．音色：自然に練習されたる声，即ち音色の一定したる発音にて厭味なきもの

ロ．音量：充実したる声音にして共鳴を

有するもの

ハ．音幅：音を区別して使用し得るもの，即ち腹音胸音，頭音を自由に使用し得べきもの

発想（エキスプレッション）……曲の要所に於て何らかの感想（ママ）を附すること。眞の感情を現はさんとする一種のアクセント

この3要素をそれぞれ樹木の「根本」「幹」「葉・花」にたとえている。とくに拍子（タイム）は最も根源的なものとして重視し，それが演奏者と聴者との間で「若し一方に於て不快の念を抱くとしたならば，其音楽は完全に目的を達したとは決して言ひ得ないのである，自分は琉球音楽を聞く度に，常に此の感を抱くものである，即ち不快の感は起さずとも少なくとも無味単調なる歌謡として，夫れが什麼も平凡にしか吾々の悩裏には響かぬ次第なのである」と述懐している。

また調子（キーエス）の項では特に本県の子供に言及し「子供は，所謂子供聲として一般に充実したる音量を有して居るのである。然るに本県あたりの子供は関東地方の子供と比較して一般に音量が浅い様に感せらるる，普通の談話聲を聞ひても，アクセントの関係もあろうが甚だ力なく且つ音調が余程低ひように思はるる。」のである。これはしかし，あたり前のことではあるまいか。方言の使用を禁じられ，なをかつ意味の分かりにくい韻文の唱歌を大和先生の前で歌わせられる当時の子供たちの立場に立ってみればである。矢野はすぐ続けて「兎にも角にも現在学校で使用して居る普通語は内地の普通語に比較して，余程孫色あることは免ぬかれない様に思はれるのである，之等は総ての六面から研究して一日も早く其発達の程を速からしめたいと思ふのである」と語っている。

発想（エキスプレッション）では，「何れにしても発想は歌詞旋律と相待ちて自然的ならざれば何等の効価もなく，故意的なる発想はかへって折角の歌曲を滑稽化して仕舞ふことがある，而かして発想は単調なる音楽よりも団体的なるものの方がより多く綺麗に感ぜられるのである，彼の管弦合奏（オーケストラコーラス）なぞに現はるる自由自在なるエキスプレッションに至っては羽化登仙の思ひを成さしむるものである」と述べ，暗に沖縄音楽，おそらくは古典音楽への無理解を示唆している。

矢野はひき続き「沖縄教育」第68号（明治44年）で，「明治聖代に於ける音楽界の趨勢」と題して，江戸時代からの邦楽の歴史を概観し，音楽取調掛設置を中心に明治初期の洋楽導入の事情を省ながら「我洋楽の普及は学校音楽によりて開発せられ以って現今の隆盛を来たしたるもの」とし，洋楽の発展の度合いを第一期取調所（掛）時代，第二期，（東京）音楽学校独立から日露戦争まで，第三期をそれ以降「茲最近の五六ヶ年」の「初期時代」と見做している。この「初期時代」の音楽界を見ると従来義太夫長唄の類が「全く卑俗なる平民楽くして兎角上流社会の門より放外」されつつあったが，今や謡曲と共に「続々として貴紳の邸内に愛玩」されつつある。対して，洋楽界の方も「私設音楽学校の設立」，雨後の筍の如き各所の「自宅教授所の如きもの」，「陸海軍楽隊」の公開演奏，各地に開催される青年音楽家による「団体的音楽会」近年頻繁となった「泰西楽人の漫遊」「新図書の出版」「楽器会社の設立」などを揚げ，その結果「従来の洋楽が教育音楽として学海を中心としつつありしにも不拘，今日は既に其範囲を広めて家庭音楽の一方に侵入しつつある」ほどの盛況ぶりである。こうした楽界の情勢は，「新（洋楽）旧（邦楽）両陣営対抗の域より進みて，今日は所謂新旧両趣味の交戦状態を呈しつつある。」とし，こうした二者の対立は「真理」として成り立たず，旧楽の方は「物質文明界の向上的精神界に呪はれつつある現今の社会は，之を唯一の健全なる娯楽機関として永遠に歓迎して行くわけには行くまい」，従って早晩「骨董的音楽として之が活用力を殺がしめ以って社会より遠ざかしむる」に至ると予測している。が一方の洋楽も「泰西式其儘なる感情を取って，以って今日直ちに我国民性に適応させんとすることは実際に於て頗る至難」であるから，これら両者の短所を補ふ改革策として「和洋調和楽」が呼ばれており，いずれにしろ「完全なる国楽」が成立するまでは，あと二三十年の時間が要ると述べている。

矢野の促え方は，一見かなりディレッタント的である。少なくとも，筆者にあっては新・旧いずれの音楽についても，自己体験を透徹した上での彼自身の美意識といったものが感知できない。邦

楽，洋楽を対立的な図式でとらえ，真理（どのような真理か不明だが）に則ってもこの両立はありえないから，いずれ「国楽」成立の方向で新しい音楽の時代が到来するという観方は，また極めて観念的なものだ。

しかしこうしたディレッタント的，あるいは観念的な文化現象の促え方は，一面洋楽導入とその後の展開の経緯からみても，その当時の必然的な結末とはいえないだろうか。音楽取調掛の事業は，単に洋楽を導入するのみならず既存の伝統的音楽を改良（俗楽の改良）することと併せ，真の「国楽」を意識的に創りあげることだったのである。体験的に積みあげられて来た諸音楽の，それへの美意識を半ば無視し，教育政策的なやり方で歩んで来た音楽教育界の趨勢が生み出した当然の帰結ともいえる。こうした矢野の観念的，あるいは図式的な文化現象の把促のしかたが，沖縄の子どもたちの実態を見ぬけなかったことは，従って当然のことであろう。そこには，異文化をありのままに見るという視点が欠落しているのである。

長包はこれに対して1912（大正元）年8月に反論している（「沖縄教育」第76号46p.～58p.）。[3]

確かに「沖縄音楽の，単純にして，変化波瀾に乏しく且，楽器の繊細にして，壮厳雄大の響なきは事実」だが，そうした面だけをとらえて音楽の優劣を定めるのは当らずとし，「沖縄音楽は沖縄的固有の特徴ありてその芸術的価値も少なからず」「沖縄音楽の他の芸術界に雄飛するや否や」を問うのではなく「沖縄音楽は沖縄音楽として横行闊歩」させればよいと主張しているのである。長包は続けて，琉球古典音楽の歴史を概述し，この音楽は「王候貴人の座上に上りたる頗る高尚の歴史を有するもの」だったが，置県以後は「社会の下層に沈淪」したため「向上発展の機会」を失ってきたと観る。が，近年は「沖縄音楽会」というものが設立されて「沖縄古文明の産物たる古楽」（古典音楽の意か？）が復興の気配にあるので「より以上の営養を与へ以て健全なる音楽」にするためにいろいろな措置を講じなければならないと主張している。

「沖縄音楽は沖縄音楽としての価値」といいながら，「健全なる音楽へ」の措置とは，明きらかに矛盾である。そこには「徳性の涵養」「俗楽の改良」といった明治期教育人をとらえた特有の囚縛があるのだろう。具体的方策として，「音楽の選擇及び其蒐集→善良音楽の普及」と「工工四を廃して西洋楽譜を用ふべし」を提言している。が，「善良音楽の普及」についてはその意味するところが曖昧で，かつある種の逡巡がみられる。つまり「劣悪なる歌曲」とは，「花柳界賤妓の口にする歌謡」であり，この「不良なる音楽」を撲滅する必要があるが，その方法については「徒らに彼等を抑制し攻撃するは頗る困難にして否殆ど不可能」だから，その外に積極的に「善良音楽の鼓吹」をし「社会民一般の趣味を高尚ならしめる」方向で「善良なる俗曲を選擇蒐集」を行い，普及をはかるべきだとしているのである。

この間の事情を考察するものとして，時代はやや下るが，田辺尚雄の沖縄調査紀行記が参考になろう。1922（大正11）年初来沖した田辺は，当時の辻遊廓の状況を次のように書きとどめている。[4]

「辻というのはつまり遊廓であるが，――当地には琉球の芸妓というものはなく，したがって娼妓なるものがすなわち芸妓で，琉球音楽の大半はこの娼妓の取扱うところであり，この種の会合はすべて辻すなわち遊廓で行なわれるのが習慣になっている。それゆえ教育家でも宗教家でも政治家でも実業家でも，この辻で宴会を催し，娼妓を傍に置いて学校の校長が教育上の演説をすることも珍しいことでなく，別にだれもこれを不思議とも何とも思っていない。」

ちなみにその時に田辺が鑑賞した舞踊は次の諸種である。[5]

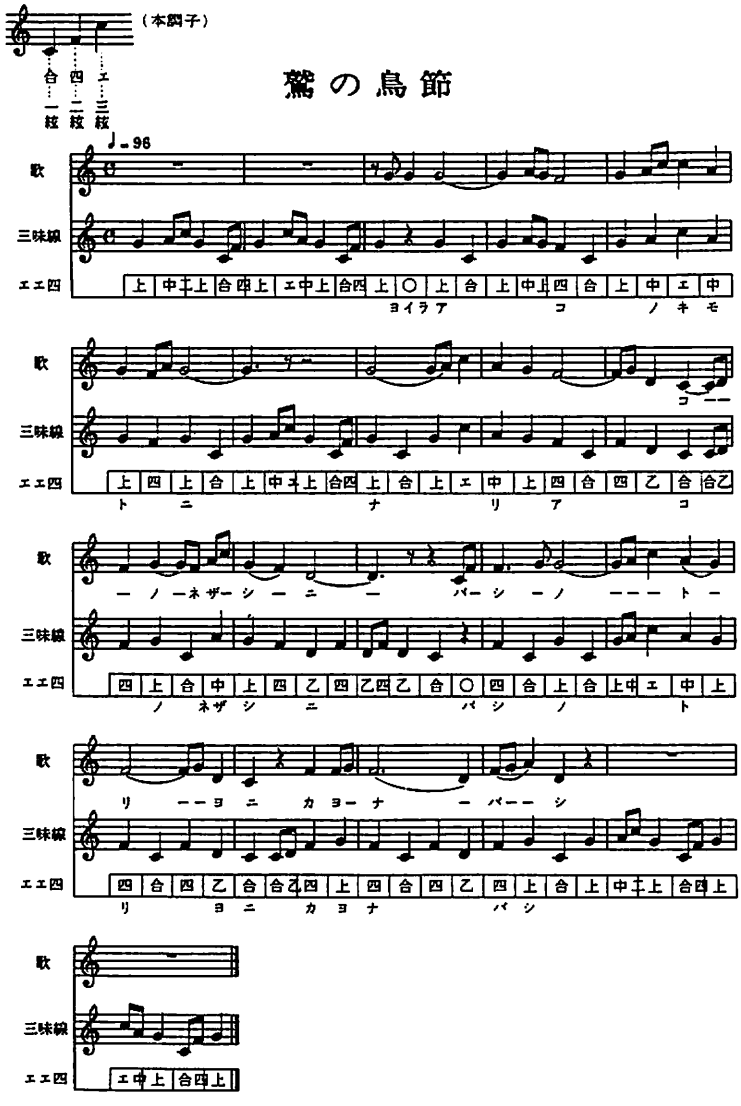
上り口説，中作田節，白帆（ママ）節，カタミ節，二才踊（夜雨節），万歳踊，谷茶節，テマト節，早作田節――ムンジュール節，与那原節，早嘉手久（ハイカドク）節，カナーヨー節，早天川節，鳩間節，浜千鳥節，カチャーシー，イケハナレ節

長包のいう「花柳界賤妓」が辻のそれなのか，あるいは別の者なのかをここで詮議する必要はあるまい。「徳性の涵養，美的情操の淘汰」を旨とし，併せて「俗楽の改良」の方向で「国楽創成」をすべき，明治期の教育家の立場，あるいは建前が，ここ沖縄独自の音楽文化を足場とする長包を自家撞着に追いやったと考えてよいだろう。「王候貴人の座上に上りたる頗る高尚」な音楽として，琉球

王府に培れた古典音楽をこの段階では引き出さざるを得なかったのである。

長包にとって真の郷土である八重山音楽への着眼，そこから編み出した教育教材としての新しい作品創りの活動は，その後10年の歳月を必要とするのである。

なお長包は同上書において，工工四の原理を五線譜をつかって書き改め，最後に八重山の古典歌曲，節歌化された「鷲の鳥」を対照譜として掲載している。[6] 参考のため，長包採譜（作譜）のものと，山内盛彬[7]のものとを併記しておこう。



鶯 ヌ 鳥 節

山内盛彬 作詞

唄

蛇皮線

ウフ―― ア――

―コ―― ヌ―― ニ ザ―― ジ―― ニ――

ナ―― リ―― ア―― コ――

―ヌ―― ム ツ―― バ― イ―― ニ バ―― ジ―

―― ヌ―― ツ―― ル―― ユ ー ニ―― ガ―

―ユ― ナ―― バ―― ジ

（第４章　註）

1．厳密にいえば，矢野と，県内其の「琉楽廃止論」に対する反論だが，後者については現段階では特定できない。

2．矢野論文中に，当時の東京音楽学校生の風貌，世間の評判などの具体的記述がある。さらに「恩師鳥居先生」「我が音楽学校」の記述もあるところから，東京音楽学校の卒業生とほぼ断定してよいだろう。ちなみに，東京音楽学校の前身，音楽取調掛の撰歌の担当者名に（明治15年）鳥居の名がみえる。（「音楽教育成立への軌跡」171p.東京芸術大学音楽取調掛研究班編，1971年，音楽之友社）

3．題目は「沖縄音楽の沿革及び家庭音楽の普及策」

4．「第一音楽紀行」1923年，文化生活研究会，復刻版は「南洋・台湾・沖縄音楽紀行」東洋音楽学会編，1963年音楽之友社

5．同上書266p.～

6．宮城鷹夫「沖縄・わが心のうた声――宮良長包の世界とその背景――」（プロジェクト・オーガン出版局1975年）に転載されている。

7．前掲書４．308p.

宮良長包合唱作品・演奏史年表（1883－1939）　新城安哲

〔凡例〕本年表は、沖縄県における合唱活動の中で重要と思われるものを、新城の判断により記録した。なお、沖縄県外における県出身者の活動も加えた。スペースの都合により、充分に記録できなかったものについては、今後加筆訂正する予定であるので、お気づきの点がありましたら御教示下さい。（連絡先・〒903　那覇市首里寒川町１－３）

年・月	演奏会・講演会・会場・主催者・音楽関係団体・指揮者・講演者	曲　目　・　他
1883		
明16・2	八重山石垣の新川に７人兄弟の３男として誕生	
1903		
明36・4	沖縄県立師範学校に入学	
1907		
明40・3	沖縄県立師範学校を卒業	
1912		
大１・？	沖縄教育76号に「沖縄音楽の沿革及び家庭音楽の普及策」を発表	
1920		
大９・６	沖縄県立師範学校創立40周年記念展覧会音楽開催	
1921		
大10・12	「鳩間節」を作詩・作曲、那覇市の帝国館で初公開、宮良作品の初めての発表会	初の合唱作品
1922		
大11・11	「嘆きの海」作詩作曲	
1924		
大13・７	「綾雲」作曲、宮良当壮作詩	
1927		
昭２・１	「鷲の鳥」作曲、泉国夕照訳詩	宮良より泉国へ詩の依頼
1928		
昭３・４	「駅路」作曲、泉国夕照作詩	宮良より泉国へ詩の依頼
4	宮良当壮・宮良長包「八重山古謡」第１輯刊行	
5	「春小雨」作曲、泉国夕照作詩	宮良より泉国へ詩の依頼
？	ハンタン山童話会による巡回演奏会、師範学校生が同行	
？	「稲苅歌」作曲、泉国夕照作詩	
1929		
昭４・10	「コイナ・ユンタ」作曲	
？	女子工芸学校と男子師範学校生徒の混声合唱団を結成、発表会を開催、沖縄における初の混声合唱団、数年間にわたり行なわれ、宮良作品を多く歌う。男子師範学校講堂	駅路、春小雨
1930		
昭５・３	「猫ユンタ」作詩作曲	

4	宮良当壮・宮良長包「八重山古謡」第2輯刊行	
6	「だんじゅ嘉利吉」作詩作曲	
6	沖縄県立師範学校創立50周年記念通俗演奏会、合唱は3年・4年・5年生	あかやうら
7	沖縄県立師範学校音楽部通俗演奏会、那覇公会堂	
8	「琉球木遣歌」作曲、新屋敷幸繁作詩	
8	沖縄県立師範学校音楽部、宮古郡教育会唱歌研究会及び八重山師範学校学生会に招聘され演奏会開催	
1931		
昭6・?	音楽通俗講演会演奏会	
1932		
昭7・2	宮良長包作曲集「首里古城」東京の共益商社より刊行	初の作曲集
5	「唐船」作曲、泉国夕照作詩	宮良より泉国へ詩の依頼
1936		
昭11・2	男子師範学校と女子工芸学校の音楽演奏会、昭和会館（那覇）、宮良長包、混声四部合唱	唐船、吾子は逝けり
7	宮良長包作曲集「琉球の新民謡」大阪の開成館より刊行	
1937		
昭12・2	男子師範学校演奏会、同校体育館	
2	建国祝賀大演奏会、波上宮式場、県立第二高女コーラス部出演	
12	音楽協会による演奏会及び戸田貞三博士講演会、昭和会館	
1939		
昭14・6	宮良長包死去	

沖縄合唱史年表（1950－1984）

＊：宮良長包関連事項

年・月	演奏会・講演会・会場・主催者・音楽関係団体・指揮者・講演者	曲目・他
1950		
＊昭25・?	宮良長包を偲ぶ会を八重山・石垣で結成	作曲集を発行
1951		
＊昭26・?	宮良長包作品を中心とした演奏会開かれる、沖縄教育音楽協会	
?	首里高校合唱部結成される	
1952		
昭27・?	AKAR合唱団結成、那覇琉米文化会館(練習場)、渡久地政一	川平朝申の発案により発足、戦後初の民間合唱団

1953		
昭28・2	AKAR合唱団琉球放送局の開局式典において演奏、琉球大学講堂（那覇）	
1954		
昭29・2	AKAR合唱団、琉球放送合唱団に改称	
1955		
昭30・1	第5回全琉高校音楽コンテスト、琉球大学、合唱の部・首里高（1位）、名護高（2位）、那覇商業高（3位）	
?	琉球大学混声合唱団（以下琉大混声に略）結成、瀬底信子	音楽科の有志により結成
?	糸洲長良編「輪唱・合唱の指導法」が、学校教育で副読本として用いられる	
1956		
昭31・2	第1回全琉音楽祭、グランドオリオン、沖縄タイムス社・沖縄教育音楽協会、真和志小合唱班（外間勲）・寄宮中合唱部（糸洲長幸）・那覇商業高合唱部（森山努）・琉球放送合唱団（渡久地政一）・ＯＴＡ合唱団（糸洲長良）	学校音楽の発表の場として毎年開催
* 3	宮良長包作曲集「南国の花」出版、沖縄教育音楽協会編、100Ｂ円	35曲収録
?	ウェストミンスター合唱団（米）演奏会	
1957		
昭32・2	第2回全琉音楽祭、グランドオリオン、久茂地小合唱部・寄宮中音楽部・那覇高合唱部・琉球放送合唱団・那覇合唱団（糸洲長幸）・琉大混声	
12	メサイヤ演奏会、Stilwell field House（ズケラン）、エドワード・Ｎ・スプレイ	沖縄、米軍人軍属150人の出演、ほぼ全曲演奏
1958		
昭33・1	第1回琉球大学音楽科発表会、沖縄タイムスホール、琉大混声、瀬底信子	
2	第3回全琉音楽祭、沖縄タイムスホール、久茂地小合唱部・首里中合唱部・首里高合唱部・琉球放送合唱団	
4	中華民国空軍オペラ、軍隊慰問および中琉親善のため来島	
1959		
昭34・1	第2回琉球大学音楽科発表会、沖縄タイムスホール、琉大混声	
2	第4回全琉音楽祭、沖縄タイムスホール、久茂地小合唱部・寄宮中合唱部・首里高合唱部	
1960		
昭35・12	沖縄教職員会「愛唱歌集」を発行	反戦歌を含む

1961		
昭36・2	米国民政府、沖縄教職員会発行の「愛唱歌集」4,000部の回収を命令	
3	那覇琉米文化会館合唱団結成、宮里進正	合唱音楽を通して社会に貢献する
6	西部合唱連盟沖縄支部結成、友利寛長支部長	朝日新聞社の協力
?	ウィーン少年合唱団演奏会	
1962		
昭37・4	東京混声合唱団沖縄公演、コザ琉米親善センター他、田中信昭	ましゅんく節、谷茶前、砂持節
5	那覇琉米文化会館合唱団、那覇混声合唱団に改称	
6	第1回合唱祭、西部合唱連盟沖縄支部	以後毎年開催
10	第1回西部合唱コンクール沖縄支部予選、高校5校・一般1団体出演、那覇高合唱部最優秀賞	以後毎年開催
10	那覇高合唱部発表会、ＲＢＣホール	
11	第17回西部合唱コンクール、鴨池体育館（鹿児島）、那覇高合唱部混声1位・総合3位	
11	ゆうな合唱団結成、高江洲義寛	在京県出身者で活動
12	第1回メサイヤ演奏会、那覇商業高体育館他、宮里進正	沖縄・米人合同の合唱団
1963		
昭38・1	第1回ライラック合唱団沖縄演奏会、松本省一	
8	那覇混声合唱団宮古・八重山演奏会	
11	第18回西部合唱コンクール、福岡、那覇高合唱部（1位）・コザ高合唱部	
12	第2回メサイヤ演奏会、Ft. Buckmer Theater（ズケラン）他、宮里進正	
?	東京混声合唱団によるレコード、合唱組曲「沖縄」発売、荒谷俊治	第18回芸術祭参加
?	国立音楽大学混声合唱団、合唱普及のため来沖、各地で合唱公演、岡本敏明	
1964		
昭39・6	ウィーン少年合唱団演奏会、琉球大学体育館（以下ＲＴに略）、ヘルムート・フロシァヴァー	
8	那覇混宮古・八重山演奏会、宮古琉米文化会館・八重山琉米文化会館、宮里進正	
9	那覇混3周年記念演奏会、ＲＴ他、宮里進正	石井歓「三つの山の詩」
11	第19回西部合唱コンクール、大分、那覇高合唱部（1位）	
12	日本女声合唱団演奏会、ＲＴ、三宅洋一郎	音協12月例会
12	第3回メサイヤ演奏会	
1965		
昭40・2	沖縄中央混声合唱団（以下中混に略）結成、嶺井	

	政三	
2	沖縄音協合唱団結成、芥川也寸志・糸洲長俊	芥川の熱心な指導
6	ゆうな合唱団第１回演奏会、日本青年会ホール（東京）	
7	関西大学グリークラブ発表会、ＲＴ	
8	ゆうな合唱団沖縄公演、琉球新報ホール・具志川村役所ホール	
8	ＮＨＫ全国音楽コンクール（合唱の部）沖縄支部予選、開南小・真和志中・那覇高合唱部が代表に選出される	以後毎年開催
8	沖縄音協合唱団、沖縄混声合唱団に改称	
10	沖縄混声合唱団、音協10月例会に出演、ＲＴ、近藤安个	
10	第１回琉大混声発表会、ＲＴ他、近藤安个	清水脩「山に祈る」
12	第４回メサイヤ演奏会、北部会館他	
1966		
昭41・3	第１回合唱講座、西部合唱連盟・朝日新聞社・琉球政府文教局、畑中良輔・森脇憲三・江口保之	初の合唱講習会、３日間開催
3	コーネル大学グリークラブ演奏会、琉球新報ホール、トーマス・Ａ・ソコール	
5	第２回ライラック合唱団演奏会、コザ琉米親善センター、松本省一	地元合唱団との交歓会を持つ
6	第１回中混定演、石川市役所ホール他、嶺井政三	
6	第２回ゆうな合唱団演奏会、新宿文化会館（東京）	
7	第２回合唱講座、西部合唱連盟他、城間繁	
8	中混宮古・八重山演奏会、宮古文化会館・八重山文化会館	
8	第３回ゆうな合唱団演奏会、具志川村役所ホール他	
9	第１回沖縄混声合唱団演奏会、琉球新報ホール、芥川也寸志・城間繁	えんどうの花、谷茶前
11	沖縄タイムス芸術選賞応募合同作品発表会、那覇琉米文化会館、中混、嶺井政三	合唱曲「みいとじい」作曲・上地昇
12	第５回メサイヤ演奏会、コザ琉米親善センター他、那覇混・中混・米人合唱団、宮里進正	
1967		
昭42・1	東洋音楽大学コールアカデミー合唱団演奏会、琉球新報ホール、保科洋	
1	第10回琉大音楽科発表会、ＲＴ、城間繁	フォーレ「鎮魂曲」
3	合唱講習会「音楽における音符の設定価値とリズムの問題」福永陽一郎	受講者150名
3	法政大学アカデミー合唱団公演、北部会館他、福永陽一郎	

	4	那覇混５周年記念演奏会、北部会館他、宮里進正	佐藤真「旅」
	5	沖縄プロムジカ合唱団（以下プロムジカに略）結成、城間繁	レベルの高い合唱団を目差す
	6	ウィーン少年合唱団演奏会、琉球新報ホール他、タイマー・ウベエ	
	6	ミシンガン大学グリークラブ演奏会、琉球新報ホール、フィリップ・Ａ・デューイー	
	6	第２回中混定演、北部会館他	清水脩「山に祈る」
	7	第10回産業人合唱コンテスト、東京文化会館（東京）、琉球海運ひめゆり合唱団、崎山用豊	
	7	第３回合唱講習会、沖縄合唱連盟、城間繁	
	8	ＮＨＫ全国学校音楽コンクール沖縄大会、ＲＴ	30校出演
	10	第１回はたらくものの音楽祭、大田体育館（東京）、沖縄合唱団、宮城正治	
	12	メサイヤ演奏会、コザ琉米親善センター他、那覇混・中混・琉大混声、宮里進正	1973年からのメサイヤ演奏会へ引きつがれる
	?	琉球放送児童合唱団結成	
1968			
昭43・	1	琉球放送合唱団解散	
	6	第１回プロムジカ定演、ＲＴ、城間繁	ハイドン「天地創造」
	7	第５回ゆうな合唱団音楽会、初台青年会（東京）	
	11	第３回中混定演、北部会館他	大中恩「ブーム・ブーム」
	11	第２回おかあさんコーラス全国大会、日比谷公会堂（東京）、大道小ＰＴＡおかあさんコーラス、柴田民子	
1969			
昭44・	4	琉球大学グリークラブ結成、新城哲夫	初めての男声合唱団
	5	第３回ライラック合唱団沖縄親善演奏会、琉球新報ホール他	
	11	第２回プロムジカ定演、ＲＴ、城間繁	モーツアルト「レクイエム」
	11	第20回全琉高校音楽コンテスト、ＲＴ、首里高・那覇高・前原高合唱部	
	12	髙江洲義寛編「沖縄民謡合唱曲集１」ホッタガクフより発行	
	12	メサイヤ演奏会、琉球新報ホール、米軍チャペル所属合同聖歌隊、トーマス・ギルキー	
	12	第６回ゆうな合唱団音楽会	
	?	玉名市民合唱団沖縄公演	
1970			
昭45・	2	那覇少年少女合唱団結成、安谷屋長也	
	3	アジア少年少女合唱祭、万国博会場（大阪）、那覇少年少女合唱団、安谷屋長也	
	3	久留米音協合唱団公演、琉球新報ホール、本間四	

	郎	
6	西部合唱連盟沖縄支部、沖縄合唱連盟に改称	
7	長崎県少年合唱団公演、北部会館他、浜田孝一	
11	第３回プロムジカ定演、ＲＴ	
11	第４回中混定演、コザ琉米親善センター	小山章三「千曲川の水上を恋うる歌」
1971		
＊昭46・1	宮良長包先生を偲ぶ音楽の夕べ、那覇市民会館（以下ＮＣに略）、沖縄タイムス社・沖縄文化協会他、プロムジカ・那覇混声	宮良長包作品集より18曲（合唱・独唱）を演奏
1	第１回那覇少年定演、ＮＣ、安谷屋長也、琉球放送児童合唱団友情出演	
2	第９回那覇高合唱部定演、沖縄タイムスホール、金城洋子	高田三郎「心の四季」
2	第14回琉大音楽科発表会、琉大体育館、長嶺由一郎	間宮芳生「混声合唱のためのコンポジションＩ」
2	第６回首里高合唱部定演、ＮＣ、富原守哉	佐藤真「旅」
3	「100人の合唱」公演、琉球新報ホール、大阪市民合唱団アイヴィーコーラス・プロムジカ、横井輝男・城間繁・榎本利彦	モーツアルト「戴冠ミサ」
4	第６回アジア少年少女合唱祭、中華民国（台北）、那覇少年	
4	イースターコンサート、フォートバクナー劇場（ズケラン）、沖縄コーラル・ソサエティー、ビェン・パンガニバン	
6	那覇混10周年記念演奏会、ＮＣ、宮里進正・富原守哉	高田三郎「心の四季」
6	10周年記念合唱祭、首里高体育館、高校４校・大学２団体・一般３団体出演、招待演奏・那覇少年・プロムジカ	清水脩「智恵子抄巻末のうた六首」
8	ザ・ヤング・アメリカンズショー、ＮＣ、ミルトン・アンダースン	
11	第４回プロムジカ定演、ＮＣ、城間繁	林光「原爆カンタータ」
11	第８回ゆうな合唱団音楽会、初台青年会（東京）	
1972		
昭47・1	第１回琉大グリークラブ演奏会、ＲＴ、新城哲夫	
2	第７回琉大混声定演、中頭教育会館	
2	第７回前原高合唱部音楽会、中頭教育会館	
2	那覇混、沖縄タイムス芸術選賞音楽奨励賞受賞	
3	第２回那覇少年定演、琉球新報ホール、安谷屋長也	
4	沖縄男声合唱団結成（以下沖縄男声に略）、宮城敏	
5	ゆうな女声コーラス（以下ゆうな女声に略）結成、	

	芳沢江美子	
5	第8回琉球フェスティバル、那覇混・プロムジカ・中混	
6	ウィーン少年合唱団演奏会、ＮＣ、アングルベルガー・アルベルト	フンパーディング「ヘゼルとグレーテル」
7	大谷楽苑合唱部演奏会、ＮＣ、林達次・伊吹新一	団伊玖磨「岬の墓」
7	第9回ゆうな合唱団音楽会、初台青年会（東京）ジラバガ会・沖縄返還同盟文化部と合同演奏	
11	ドン・コサック合唱団演奏会、ＮＣ、ニコライ・コストルコフ	本格的なロシア民謡
11	ゆうな合唱団創立10周年記念第10回演奏会、東京都勤労福祉会館、髙江洲義英・安次富勇・島袋亨	山内盛彬採譜「首里王府のオモロ」「地方ノロのウムイ」
11	第5回プロムジカ定演、ＮＣ、城間繁	パレストリーナ「教皇マルチェッルスのミサ」
11	第3回全日本合唱フェスティバル、名古屋市民会館、那覇高合唱部銅賞	
12	第1回ゆうな女声演奏会、那覇市文化センター	
12	第2回琉大グリークラブ演奏会、琉球新報ホール、小渡修、新城哲夫	清水脩「月光とピエロ」
12	本土と沖縄を結ぶ少年少女合唱祭、ＮＣ、滝野川少年少女合唱団（東京）・那覇少年少女等7団体	
1973		
昭48・1	第5回中混定演、北部会館他、嶺井政三	佐藤真「蔵王」
3	東京音楽大学混声合唱団コールフロイデ演奏会、ＮＣ	
3	沖縄市少年少女合唱団（以下沖縄少年に略）結成、国吉富	
4	徳島文理大学音楽学部演奏会	沖縄各地で演奏
8	那覇少年・西条少年少女合唱団合同演奏会、琉球新報ホール	
11	第2回沖縄県芸術祭合唱公演、ＮＣ、那覇高合唱部・首里高合唱部・那覇混	
12	第1回沖縄少年（コザ少年少女合唱団）定演、国吉富	
12	第1回メサイヤ演奏会、ＮＣ、琉球新報社他、那覇混・中混・ゆうな女声・小禄高合唱部・首里高合唱部・コザ高合唱部、真栄城隆、合唱指導・宮里進正	歳末助け合いチャリティー、以後毎年開催
1974		
昭49・1	第8回琉大混声定演、ＮＣ、吉本嘉典・具志堅ひろみ・嵩原克之	藤沢孚「わしはかかしじゃ」
4	第3回那覇少年定演、ＮＣ	
5	第6回九州沖縄芸術祭・ライラック合唱団第4回	

	沖縄演奏会、ＮＣ、松本省一	
6	那覇混13周年記念演奏会、ＮＣ、宮里進正	佐藤真「眠れ幼き魂」
7	平良市少年少女合唱団（以下平良少年に略）結成、豊見山恵永	平良市文化センターの少年事業
8	那覇少年・西条少年合唱団ジョイント・コンサート、西条市民会館（愛媛）	
9	ＮＨＫ全国学校音楽コンクール沖縄地方大会、浦添市民会館（以下ＵＣに略）、11校参加	
9	第14回合唱コンクール、ＵＣ、９団体出演	
11	第29回西部合唱コンクール、佐世保市民会館（長崎）、琉大混声金賞、中混銀賞、那覇高合唱部銅賞	
11	伊志嶺朝次編「沖縄民謡による合唱曲集・第一編」発行コロンビア音楽芸能	16曲収録
12	第２回メサイヤ演奏会、ＮＣ、富原守哉、４団体出演	
1975		
＊昭50・1	全琉音楽祭25回記念・宮良永包顕彰音楽祭、ＮＣ、沖縄タイムス社・沖縄県音楽教育研究会、中混・那覇混・沖縄男声	
3	第９回琉大混声定演、ＮＣ	
6	第１回沖縄男声演奏会、ＮＣ、宮城敏・砂川徹夫	清水脩「山に祈る」
6	ウィーン少年合唱団公演、ＲＴ	
6	浦添市少年少女合唱団（以下浦添少年に略）結成	
7	プラハ少年少女合唱団演奏会、ＮＣ、那覇少年出演	
7	名護市少年少女合唱団（以下名護少年に略）結成、新里節子	
8	中混10周年記念演奏会、ＵＣ・中頭教育会館、嶺井政三	「スタバート・マーテル」
8	第３回合唱講座、ＵＣ、沖縄県合唱連盟、高野広治・近藤安个・泉恵得	
8	沖縄少年・尼崎少年少女合唱団合同演奏会	
9	東京混声合唱団演奏会、ＮＣ、宮本昭嘉	林光「原爆小景」
10	北部混声合唱団（以下北部混声に略）結成、崎浜敏江	
11	第４回沖縄県芸術祭合唱公演、ＮＣ、那覇少年・首里高合唱部・琉大混声・中混	清水脩「焔の歌」
12	第３回メサイヤ演奏会、ＮＣ、真栄城隆、５団体出演	
1976		
昭51・2	中混・沖縄タイムス芸術選賞奨励賞受賞	
3	第10回琉大混声定演、ＮＣ	
3	国立アカデミー・ロシア合唱団演奏会、ＮＣ、Ａ・	ロシア民謡「おお、広き野

	B・スペシニコフ	よ」
3	第１回浦添少年定演	
5	那覇混15周年記念演奏会、ＮＣ、宮里進正	伊志嶺朝次「沖縄民謡による合唱曲集」
6	第15回合唱祭、ＮＣ、23団体出演	
7	チェコ少年少女合唱団演奏会、ＮＣ、イジー・フワラ	
8	第１回名護少年定演、北部会館、新里節子、与那覇末子	
8	第１回少年少女合唱祭、ＮＣ、沖縄少年少女合唱連盟、那覇少年・沖縄少年・浦添少年・名護少年	以後毎年開催
8	那覇少年特別東京公演、虎の門ホール（東京）	
8	第10回中混定演（沖縄タイムス芸術選賞奨励賞受賞記念）、ＮＣ、嶺井政三	ハイドン「四季」、モーツアルト「魔笛」
11	第５回沖縄県芸術祭合唱公演、ＮＣ、那覇少年・上山中合唱部・首里高合唱部・琉大混声・那覇混	金井喜久子「にーぶい次郎」
12	第２回沖縄男声演奏会、ＮＣ、宮城敏	男の子の子守唄・節の歌
12	第１回北部混声演奏会、北部会館、島袋チエ子	
12	第４回メサイヤ演奏会、ＮＣ、富原守哉、５団体出演	
12	那覇少年・尼崎少年少女合唱団合同演奏会、ＮＣ	
1977		
昭52・1	うらそえ市民文化祭、ＵＣ、浦添少年・沖縄アカデミー室内合唱団・沖縄男声・浦添中１年８組	浦添市民音頭・安里屋節
3	那覇高合唱部15周年記念演奏会、ＮＣ	
4	中央合唱団アンサンブルケーナ演奏会、ＮＣ、沖縄青年合唱団協演	太陽への讃歌
6	戦没者33回忌慰霊特別公演「レクイエム沖縄」、ＮＣ、中混	高江洲義寛作曲
8	沖縄少年交歓演奏会、豊中市民会館（大阪）	
8	平良少年・那覇少年親善演奏会、平良市民会館（以下ＨＣに略）	
8	第８回中混定演、ＮＣ、嶺井政三	シュトラウス「こうもり」
10	ゴールドブレンドコンサート、ＮＣ、ＲＢＣゴールドブレンド合唱団（沖縄男声・ゆうな女声・中混・那覇混・琉大混声・一般応募者）、石丸寛	砂持節
11	第32回西部合唱コンクール、長崎市公会堂、首里高合唱部・那覇高合唱部・琉大混声・中混・那覇混	
11	第６回沖縄県芸術祭合唱公演、ＮＣ、那覇少年・沖縄少年・首里高合唱部・那覇高合唱部・中混	中村透「みのる大地のふるさと」
11	第２回北部混声定演、東江小体育館	
12	第５回メサイヤ演奏会、ＮＣ、小松一彦、５団体	

	出演	
1978		
昭53・2	東京混声合唱団演奏会、ＨＣ・石垣第二中体育館・宮本昭嘉	
3	第12回琉大混声定演、ＮＣ、渡口政春	
3	合唱講習会、労働福祉会館、日本合唱連盟、髙田三郎・小林光雄	274人が受講
6	ウィーン少年合唱団公演、ＮＣ	
6	ゆうな女声演奏会、労働福祉会館、芳沢江美子	平井哲三郎「おかあさん」
6	第17回合唱祭、ＵＣ、27団体出演	
7	第３回少年少女合唱祭、ＮＣ、７団体出演・滝の川少年少女合唱団・尼が崎少年少女合唱団友情出演	
8	滝の川少年少女合唱団演奏会、登野城小・具志頭中、大浜当忠	
8	那覇混・玉名市民合唱団合同演奏会、ＵＣ、宮里進正・桜井丸雄	団伊玖磨「筑後川」
9	国頭地区中学校合唱の集い、名護小体育館、21校参加、国頭支部中学校音楽研究会	
11	第３回沖縄男声演奏会、ＮＣ、宮城敏	多田武彦「柳河風俗詩」
11	第３回北部混声演奏会、名護小体育館、崎浜敏江	
11	第７回沖縄県芸術祭合唱公演、ＮＣ、上山中合唱部・首里高合唱部・那覇高合唱部・沖縄男声・那覇混	広瀬量平「海の詩」
11	第５回沖縄青年合唱団発表会、労働福祉会館	
12	第１回平良少年定演、ＨＣ、髙里千穂子	
12	第１回混声合唱団せせらぎ演奏会、読谷村中央公民館	
12	第６回メサイヤ演奏会、ＮＣ、儀部寛、５団体出演	
12	広島・沖縄友情のコーラス演奏会、琉球新報ホール、那覇少年、広島ジュピター少年少女合唱団	
1979		
昭54・2	第13回琉大混声定演、労働福祉会館、仲地宗俊	磯部俶「北への回帰」
3	那覇混18周年記念演奏会、ＮＣ、宮里進正	大中恩「風のうた」
7	第２回選抜洋楽芸術祭、ＮＣ、沖縄タイムス社、那覇少年	中村透「童の領域」
7	第４回少年少女合唱祭、ＮＣ、６団体出演、倉敷少年少女合唱団友情出演	奥平潤「たかどーい」
7	中混・法務大臣賞受賞、矯正施設への合唱活動の功績により表彰	
8	ハンガリー少年少女合唱団演奏会、ＮＣ、ラスロ・チャーニー、ワレリア・ボトカ	ブラームス「ワルツ」

	8	西条少年合唱団・那覇少年合同演奏会、労働福祉会館、寺田親良・工藤キチ子・宮田邦郎	
	9	第34回西部合唱コンクール沖縄大会、ＮＣ、日本合唱連盟・朝日新聞社、49団体参加、金賞（那覇高合唱部・首里高合唱部・中混・那覇混）、銀賞（コザ高合唱部・琉大混声）、長崎混声合唱団「ああ沖縄その日こそ」を演奏	西部合唱九州コンクール沖縄で初めて開催
	9	合唱指導者講習会、沖縄県合唱連盟、磯部俶	
	10	いそべとし男声合唱団・沖縄男声合同演奏会、ＮＣ、磯部俶・宮城敏	磯部俶「なんなんななつの」初演
	10	第８回沖縄県芸術祭合唱公演、ＮＣ、上山中合唱部・コザ中合唱部・那覇高合唱部・首里高合唱部・中混	団伊玖磨「筑後川」
	11	ロシア共和国イスコルカ・うたとおどりの民族アンサンブル公演、労働福祉会館	
	11	平和祈念沖縄音楽祭東京公演、読売ホール（東京）、日本作曲家協会、二期会・城北少年少女合唱団	
	12	第７回メサイヤ演奏会、ＮＣ、富原守哉、６団体出演	
*	12	沖縄の生んだ作曲家・宮良長包の夕、日本教育会館（東京）、東京八重山郷友会、滝野川少年少女合唱団、大浜当忠、粟国安彦演出	本土での宮良長包作品発表
1980			
*昭55・	1	宮良長包顕彰音楽祭、ＮＣ、沖縄県音楽教育研究会・沖縄タイムス社、那覇少年・那覇混・沖縄男声・中混	えんどうの花、コイナ・ユンタ
	2	第23回琉大音楽科発表会、ＵＣ、泉恵得	中村透「童の領域」
*	2	宮城鷹夫著「沖縄・わが心のうた声」、譜久村エミ編「宮良長包作曲集」発行	
	2	第４回北部混声定演、名護高体育館	
	2	うの花合唱団５周年記念発表会、宇栄原小、宮田邦郎	
	3	第１回那覇ママさんコーラスまつり、琉球新報ホール、那覇市ママさんコーラス連絡協議会他、９団体出演	お話・石井歓
	3	第14回琉大混声定演、ＮＣ	中村透「おきなわ詩集」
	3	沖縄少年・津山少年合唱団（岡山）交歓演奏会、美里小体育館	奥平潤「海はあこがれ」
	3	平良少年・津山少年合唱団交歓演奏会	
	5	那覇女声合唱団結成、安谷屋正富	
	6	交響詩あけもどろ公演、ＮＣ、中混・琉大混声・城岳混声合唱団・うの花合唱団・久茂地ママさんコーラス・大道ママさんコーラス：城南ママさん	作曲・上地昇

		コーラス	
	6	沖縄の雲の中から公演、労働福祉会館、那覇市役所合唱団・沖縄青年合唱団	
	6	沖縄男声宮古・八重山公演、ＨＣ・石垣第２中体育館、宮城敏	清水脩「山に祈る」
＊	6	八重山・わが心のうた「宮良長包の夕」公演、石垣第２中体育館、八重山青年会議所、石垣市内６小学校の児童合唱団	
	7	第５回少年少女合唱祭、ＮＣ、４団体出演、高雄市牧歌児童少年合唱団（台湾）友情出演	
	8	沖縄と広島を結ぶ合唱の夕べ、広島市青少年センター、那覇少年・ジュピター少年少女合唱団	
	8	名護少年・半田市交歓演奏会、半田市民会館（愛知）、名護少年・豊田市交歓演奏会、豊田市民会館（愛知）	
	8	中混15周年記念演奏会、ＮＣ、嶺井政三	フォーレ「レクイエム」
	9	金武町少年少女合唱団結成	
	11	首里少年少女合唱団（以下首里少年に略）結成	
	11	第９回沖縄県芸術祭合唱公演、ＮＣ、安岡中合唱部・上山中合唱部・那覇高合唱部・那覇混	
	11	北部混声５周年記念定演、名護高体育館	
	12	第九演奏会、ＮＣ、沖縄第九実行委員会、沖縄第九合唱団、儀部寛	沖縄初の第九演奏会
	12	沖縄男声「ポーギーとベス」公演、沖縄ジャンジャン	
	12	第８回メサイヤ演奏会、ＮＣ、渡辺央己、８団体出演	
	?	中村透作曲「少年少女（女声）合唱のための組曲・わらべの領域（ワラビヌタマシ）Ｉ」楽譜出版、音楽之友社	
1981			
昭56・	1	宜野湾市少年少女合唱団（以下宜野湾少年に略）結成	
	1	いしがき少年少女合唱団（以下いしがき少年に略）結成、中村睦子	
	2	第12回日本の音楽を世界の人びとに――青少年のための合唱音楽会、浅草公会堂（東京）、二期会合唱団・城北少年少女合唱団	砂川昌基「沖縄の夜明け」、八洲秀章「沖縄」
	4	天使のこえ合唱団公演、労働福祉会館	
	5	那覇女声合唱団創立１周年記念ファミリーコンサート、母子福祉センター、安谷屋正富	
	5	第20回合唱祭、ＮＣ、35団体出演	
	6	那覇混20周年記念演奏会、ＮＣ、渡口政春・宮里	中村透「サシバ」初演

	進正	
7	第１回いしがき少年定演、竹富小中学校体育館	
8	第10回中混定演、沖縄市民会館（以下ＯＣに略）	ヴィヴァルディ「グロリア」
10	第10回沖縄県芸術祭合唱公演、ＮＣ、コザ中合唱部・安岡中合唱部・本部高合唱部・首里高合唱部・那覇混	
11	第６回北部混声定演、名護小体育館、崎浜敏江・玉城哲也	モーツアルト「魔笛」
12	沖縄少年・浦添少年「歳末チャリティーコンサート」、ＯＣ	
12	第９回メサイヤ演奏会、ＮＣ、富原守哉、８団体出演	
1982		
昭57・1	首里少年１周年記念演奏会、城西小体育館	
1	合唱指導者講習会「コーラス・クリニック」、沖縄県合唱連盟、松本秀喜・佐々金治・辻正行・松浦ゆかり	
1	新春全沖縄学級合唱発表会、ＵＣ、沖縄県中学校音楽教育研究会	
3	第九演奏会、ＮＣ・ＯＣ、沖縄タイムス社、中混・那覇混・沖縄男声・城岳混声・首里コールフロイデ、黒岩英臣、合唱指導・宮本昭嘉	
5	反核・平和コンサート・イン沖縄、ＮＣ、沖縄青年合唱団、那覇市役所合唱団・那覇高合唱部・首里高合唱部・豊見城小ＰＴＡ合唱団・労音合唱団	
7	明治大学グリークラブ演奏会、ＮＣ・ＯＣ、外山浩爾・北橋伸治	三木稔「阿波」、湯山昭「流氷のうた」
7	第７回少年少女合唱祭、ＮＣ、８団体出演、尼崎少年少女合唱団（兵庫）友情出演	
7	テキサス少年合唱団公演、ＯＣ・ＮＣ、ジャック・ノーブル・ホワイト	
7	名護少年・半田少年少女合唱団交歓演奏会、名護高体育館	
7	「はだしのゲン」公演、ＮＣ、広島大学混声合唱団・広島大学東雲混声合唱団パストラール・広島女子大学フラウェンコール・沖縄オペラアンサンブル合唱団	
8	第11回中混定演、ＯＣ、森山政和・嶺井政三	ブルックナー「テ・デウム」
9	沖縄男声10周年記念第４回演奏会、ＮＣ、宮本昭嘉・宮城敏	中村透「海流」初演
9	第１回浦添市民コンサート合唱祭、ＵＣ、浦添市文化協会音楽部、浦添市内の合唱団10団体出演	
10	第３回沖縄市民コンサート、ＯＣ、沖縄オペラア	

		ンサンブル合唱団、前原信彦	
	11	第７回北部混声定演、名護小体育館	
＊	12	宮良長包生誕百周年記念演奏会、石垣第二中学校体育館他、いしがき少年・那覇少年・浦添少年	桑の実・春小雨
	12	第10回メサイヤ演奏会、ＮＣ・ＯＣ、富原守哉、合唱指導・宮本昭嘉、９団体出演	
1983			
昭58・	1	沖縄少年創立10周年記念演奏会、ＯＣ、大舛敏彦	奥平潤「屋良むる池物語」
	1	コールよなばる第２回発表会	
	2	名護少年・豊田市少年少女合唱団（愛知）交歓演奏会、名護市児童センター	
	3	第４回那覇おかあさんコーラス発表会、労働福祉会館、那覇おかあさんコーラス連絡協議会・琉球新報社、17団体出演	
＊	3	生誕100年記念宮良長包顕彰音楽祭、ＮＣ、那覇混、渡口政春・長田ひろみ・宮里進正、合唱・独唱24曲演奏	沖縄タイムス創立35周年記念事業
	3	第20回那覇高合唱部定演、ＮＣ	
	3	ウィーン少年合唱団演奏会、ＮＣ	
	4	第１回宜野湾少年発表会、宜野湾市民会館（以下ＧＣに略）	
	4	第九演奏会、ＮＣ・ＯＣ、沖縄タイムス社、黒岩英臣、合唱指導・郡司博・宮本昭嘉、那覇混・中混・沖縄男声・首里コールフロイデ	沖縄タイムス創立35周年記念事業
	7	第１回北部地区婦人コーラスまつり、東江小、３団体出演	合唱を通した社会づくり
	8	第８回少年少女合唱祭、ＮＣ	
	8	宜野湾少年・台湾の合唱団と合同演奏会、台北市実践堂（台湾）	
＊	8	宮良長包生誕百周年記念事業期成会による宮良長包先生顕彰記念誌「ふるさとの歌心よ永遠に」発行	教え子による追憶記
	8	第12回中混定演、ＯＣ	モーツアルト「戯冠ミサ」
	8	名護少年・豊田市少年少女合唱団交歓演奏会、名護市児童センター	
	8	平良少年・豊田市少年少女合唱団交歓演奏会、ＨＣ	
	8	合唱講習会、沖縄県合唱連盟、森脇憲三	
	8	浦添混声合唱団結成、伊志嶺朝次	
	9	第５回沖縄男声演奏会、東江小、宮城敏	清水脩「月光とピエロ」
	10	沖縄男声・具志川市民合唱団「合唱の夕べ」、具志川市復帰記念会館、具志川市教育委員会	
	11	第12回沖縄県芸術祭洋楽公演、豊見城中央公民館、	宮良長包「鶯の鳥」

	沖縄男声・那覇混	
11	第１回城岳混声合唱団定演、労働福祉会館、吉本嘉典	中田喜直「都会」
11	第８回北部混声定演、名護小体育館、崎浜敏江	佐藤真「蔵王」
11	宜野湾混声合唱団結成	
12	第１回那覇女声演奏会、労働福祉会館、安谷屋正富	花ぬ風車
12	第11回メサイヤ演奏会、ＮＣ・ＯＣ、糸数武博、合唱指導・宮本昭嘉、10団体出演	
12	第九特別演奏会、ＮＣ・ＯＣ、沖縄第九をうたう会、小泉知裕、合唱指導・宮本昭嘉	
1984		
昭59・1	第１回混声合唱団フォンターナ演奏会、労働福祉会館、泉恵得	信時繁「沙羅」
1	第３回新春沖縄学級合唱発表会、ＮＣ、沖縄県中学校音楽教育研究会、27中学参加	
2	那覇市役所合唱クラブ発表会、沖縄ジャンジャン	
2	平良少年結成10周年記念演奏会、ＨＣ	
2	平良少年・いしがき少年合同演奏会、石垣第二中体育館	
2	合唱指導者講習会、沖縄県合唱連盟他、宮本昭嘉	
2	奥平潤チャリティー音楽会、ＧＣ、宜野湾少年・宜野湾混声合唱団・台湾光武・双園婦女合唱団	
2	東京混声合唱団公演・こども芸術劇場、ＯＣ・ＮＣ・久米島高体育館・ＨＣ、文化庁、宮本昭嘉	柴田南雄編曲「追分節考」
2	第７回コザ中学校合唱部定演、ＯＣ	
2	ブーゲンビリア10周年記念コンサート、ＨＣ	
3	具志川市少年少女合唱団結成	
3	第11回沖縄少年定演、ＯＣ、札幌少年少女合唱団共演	
3	合唱組曲「てだこ讃歌」発表演奏会、ＵＣ、ウナ・ヴォーチェ・コール、おもろ男声合唱団、浦添市委嘱作品	高江洲義寛作曲
4	北部混声・名護少年・半田混声合唱団交歓演奏会、名護小体育館	
8	沖縄少年・敦化天使少年少女合唱団（台湾）合同演奏会、台北市	
8	光武児童合唱団（台湾）・具志川少年親善演奏会、具志川市復帰記念会館	
8	第13回中混定演、ＯＣ	
9	第13回沖縄県芸術祭洋楽公演、ＵＣ、中混・沖縄混声合唱団	
9	第２回沖縄男声・いそべとし男声合唱団合同演奏	磯部俶「なんなんななつの」

	会、石橋メモリアルホール（東京）、宮城敏・磯部俶	
10	那覇混23周年記念演奏会、ＮＣ、宮里進正・渡口政春	パレストリーナ「教皇マルチェスのミサ」
11	県民オペラ「太陽の反逆」、ＮＣ、ウナ・ヴォーチェ・コール・沖縄男声・琉大グリークラブ	海勢頭豊作曲
11	第９回北部混声定演、名護小体育館	
12	歳末助け合いチャリティー演奏会、ＮＣ、那覇少年・首里少年・浦添少年	
12	第12回メサイヤ演奏会、ＮＣ・ＯＣ、富原守哉、合唱指導・宮本昭嘉、12団体出演	